

# ノオトの上の粉、テクストの粉末

——尾崎翠「第七官界彷徨」試論——

村瀬 甲 治

一 部厚な一冊のノオト、書き物記

尾崎翠は、一九二九／昭和四年に『少女世界』五月号への作品掲載を期に少女小説群の執筆を止め、翌年「映画漫想」を連載していた『女人芸術』から遠ざかり、「文学的な完成期に入る」とされている。それは一九三〇年から翌一九三一年の時期が、『文学党员』（一九三二年二、三月号）に全編の七分の四が掲載され、板垣鷹穂編集の『新興芸術研究二』（一九三一年六月）に全編が掲載された「第七官界彷徨」の執筆と発表の時期に当たるからである。一九六九年に平野謙と花田清輝の推奨による『全集・現代文学の発見』第六巻『黒いユーモア』への作品収録において尾崎翠が戦後「発見」されることとなるのも、この作品によってであった。<sup>(2)</sup>しかし、同作品が一九三三年に啓松堂から単行本として刊行されるのを待たずして尾崎翠はこの前年に、頭痛鎮静剤の習慣的な多量服用

に伴う副作用とも考えられる難聴や幻覚症状による衰弱の為、長兄に伴われて鳥取に帰郷している。そして、この単行本において新鮮な驚きを与えられた平野と花田による一九六九年の作品収録時には、執筆活動とは無縁のその身は、高血圧症と老人性の白内障に悩まされる態であった。また、翌々年の一九七一年には、作品集『アップルパイの午後』出版の連絡があったものの、尾崎翠は高血圧症と老衰による全身不随の病床にあり、その出版を待たずして肺炎を併発しながら息を引き取っている。<sup>(3)</sup>こうした書き手をめぐる一連の「不遇」は、以下のことに思い至る読み手のよすがとなろう。つまり、「年譜」に録されている「第七官界彷徨」による「文学的な完成」というものが——ひいてはハードカバーに装丁され函に収められた個人全集による集大成に裏打ちされた「文学的な完成」なるものが——尾崎翠の書き手としての進退と相前後した代物であったということである。<sup>(4)</sup>

現新宿区上落合に見つけた一戸建の「トタン屋根の二階の部屋の机の前に坐りきりで書き、そのため坐布団の下の畳は腐って落ちた」という逸話は、如上の経緯をもった同作品執筆当時の様子として言及される<sup>(5)</sup>。頭痛鎮静剤の常用による「頭痛」「難聴」「幻覚症状」に苛まれながらのこうした書き手の光景こそ、「第七官界彷徨」に取り置かれていた光景であると目される<sup>(6)</sup>。そして、このことは、そのページを手繰り目を落とす読書の手付き・目付きが先ず手繰り寄せ視線を注いでしまう作品冒頭——首巻——に、「二冊」の「ノオト」が置かれていたという物語の細部と無縁ではない。

「…」私はひどく赤いちぢれ毛をもつた一人の瘦せた娘にすぎなくて、その家庭での表むきの使命はといへば、北むきの女中部屋の住者であつたとほり、私はこの家庭の炊事係であつたけれど、しかし私は人知れず次のような勉強の目的を抱いてゐた。私はひとつ、人間の第七官にひびくやうな詩を書いてやりませう。そして部厚なノオトが一冊たまつた時には、ああ、そのときには、細かい字でいつばい詩の詰まつたこのノオトを書留小包につくり、誰かいちばん第七官の発達した先生のとこに郵便で送らう。そうすれば先生は私の詩をみるだけで済むであらうし、私は私のちぢれ毛を先生の眼にさらさなくて

済むであらう。(私は私の赤いちぢれ毛を人々にたいへん遠慮に思つてゐたのである)<sup>(7)</sup>

作品の首巻の「ノオト」は、日当たりの悪い「北むきの女中部屋」の「机」の上に置かれ、めくるめく頁が「部厚」「…」にたまり、あるいは「細かい字でいつばい」「…」詰め込まれる「詩」作という書記行為へと開かれ且つ「一冊」の装丁のうちに束ねられている。そして、それは、「書留小包」という郵便物の送達を確実にする特殊取扱の下に包装され、「誰かいちばん第七官の発達した先生のとこに郵便で送」られることよって、しかし日付不定のままに最上の一人の読者に確実に手渡されることを期待されてもいる。作品首巻の細部に、書記／読書行為自体を志、向し欲望する「私」の様態が折り畳まれているのを垣間見ることができるのである。しかし「炊事係」なる「表むきの使命」から言えば、一人称単数の語り手として作品の物語を束ねるはずの「私」の、書記／読書行為自体を志望する様態は言わば「裏むきの使命」であって、書き手として「私」が顕現することは回避されている。また、その書記行為がいつか読書行為へと手渡されていく過程においても「書留小包」による「郵便」という方法を取ることで、読解が許されている書留先の「先生」なるひとりの最上の読者の「眼」にさえ、自身を書き手として「さら」すことは周

到に回避されている。それは端的に、纏れたその髪質において作品の物語が折り畳まれてもいる「ひどく赤いちぢれ毛」を「たいへん遠慮に思」うという容姿をめぐる括弧内の断りにおいて、主人公であり書き手である「私」は見えつ隠れつしているのである。

こうした書記／読書行為を志望する「私」が、あくまでも作品に見え隠れするその様態は、そもそも、「たいへんな佳人を聯想させるやうにできてゐる」ことへの「けむつたい思ひ」と、詩集が完成した際には「もうすこし私の詩か私自身かに近い名前を一つ考へなければならぬ」と「いう」思「い」において伺われる「小野町子という「自身の」姓名」において、「命名」なる先験的な言語行為上の齟齬・乖離として設定されていた。姓と名との繋がりと、名の語呂の上下において「小野小町」を「聯想」させられると同時に、一文字だけ直ちに「町子」と転倒させられてもいることによって、その「姓名」は「私」の容姿の適切な表象と成り果ててしまっているとも見える。「姓名」をめぐる思いめぐらせられていることは、詩作に際して、「佳人」ではない「歌人」・「詩人」としての自身への命名・改名なる決定的な言語行為の介在をもって立ち会われるべきであるような事態、つまり「人知れず」孕まれる書き手の誕生が待ち望まれているということに他ならない<sup>(8)</sup>。

改名をもって呼ばれるべきであるような書き手の誕生が、しかし「けむつたい」姓名をもって呼ばれる「私」を「人知れず」仮葬に付す手付きと同時に見え隠れしている代物であるように、こうして志され待ち望まれるものは、あくまでも孕まれたまま、臨月を迎えることはない。「人間の第七官にひびくやうな詩を書いてやりませう」という「人知れ」ぬ「勉強の目的を抱」きながら、しかし「ただぼんやりとさう考へただけのことで」あり、そもそも「人間の第七官といふのがどんな形のものかすこしも知ら」ず、その「定義をみつけなければならぬ次第」に陥っている「私」の様子が、如上の「私の詩のノオト」の「絶えず空白がち」な様に書き込まれているのである。「祖母」と暮らしていた「山国」の「ゐなか」から上京し、主人公として作品を占有するはずの「私」に与えられている配置、つまり書記／読書行為への志望を懐胎する書記／読書空間とは、小野一助と二助という兄と佐田三五郎という従兄が暮らす「ひどく古びた平屋建」の「北むきの女中部屋」である。そこには「私」が祖母から受け取った紙幣の中から三五郎が買ってきた「机」が置かれ、その「机の上」には、三五郎が「粘土をこね」、「私」が「不出来な電気笠」として「針金に糸をあみつけ」という共同作業によって生み落とされた「電気スタンド」が置かれる。この書き物机は「それぞれに勉強家で、みんな人生の一隅に何かの貢献をしたい

ありさまに見えた」「変な家庭の一員としてすこすこすなか、文學・詩作を志す「私」に与えられた書記／読書空間の中核をなしている。この書き物机こそ、「粘土のスタンドのあかり」で辛うじて筆記に必要な明度を確保された下で、手にされた筆記具の運びによって詩作が展開されることが待ち望まれる「ノオト」の置かれ得る唯一の装置に他ならないのである<sup>(9)</sup>。

そもその「私の旅立ちを早め」、その「ぼんやりと」した「勉強の目的」と同じく「漠然としたひとつの気分」を醸し出していた三五郎の何通かの「手紙」の文面には、「小野一助も、二助も、とつくに忘れてゐるだらう。小野町子だけが解つてくれるだらう」と「書き送」られた「音楽予備校」に通う「受験生のうらぶれた心もち」が垣間見えていたことを想起できる。そして「手紙」の「同感」的な読「解」を託されて「私」に送付された三五郎の書記行為の、その「うらぶれた心もち」は、それを認める「ひどく拙い字と文章」に文字通り擬えられる手紙の書き手の姿態、すなわち「宵から蒲団をだして寝てしまはなければならぬ」という「電気がない」女中部屋の「蠟燭の灯」に照らし出された「たたみの上で」手紙が書かれているという書き手の姿態に起因している。「すこしうらぶれてみえた」「三五郎の後姿を見ない以前から」「私」が「彼の苦しみに同感をよせ」得たのは、明度の不十分な「蠟燭の灯」の焰の揺れとともに、「たたみ」に縫い込まれた乾燥し

た植物繊維の凹凸に沿って歪み、紙葉の「うら」に穴の「やぶれ」をも来たしていたであろう「うらぶれた心もち」が認められた「手紙」が置かれている地平に同じく横たえられていたものこそ、手紙の書き手である三五郎の身に他ならなかったからである。「手紙」や「ひどく拙い字と文章」に書き手がひしと身を寄せる世界は、蠟燭の灯によって濃淡をもった自閉した空間として束の間浮かび上がるだけで、家族の中の読解可能性を奪われているままに「たたみ」に伸べられているのである<sup>(10)</sup>。

如上の三五郎が「私」の為に女中部屋を宛がい机の一脚を買い求め、予備校をさえ休んで一脚の電気スタンドを捻り出したことは、主体的な著者を立ち上げ、その中核を支持する安定した書記行為の実現が、文化的な装置の適正な配置にかかっていることへの自省から生まれた配慮であった。書記／読書行為に向かうたびに、その行為に適合した規則正しい身体姿勢を取ること無言のうちに要請する書き物「机」は、日常的な挙措動作の地平である「たたみ」からの立ち上がった形状において、より安定的な書記行為を確保する。とともに、その机上の「電気スタンド」の設置は、安定した充分な明度のもとでの読書行為を確保している。こうした机上と燈下のあいには「ノオト」が伸べられ、如何なる書記行為にも開かれた白紙の頁が「一冊」に束ねられたその装丁におい

て、「私」の書記行為を「転して」「一冊」の「詩集」として読書行為へと差し出すべく綴じ合わされている。ここには、主体的な著者なるものが析出される機制の一連の装置を認めることができるのである。しかしまたその机には、自身の詩を「私の恋人におくるつもりであつたけれど、まだ「…」しまつて」置くことを可能にする「抽斗」という収納用の空間が装置されてもいる。書き物机をめぐって立ち上げられる主体的な著者像なるものは、備えられた「抽斗」において引き出されることを夢見ることに、先述したようにあくまでも「空白がち」でいまだ匿名性を帯びた姿なのであり、読み書きを普通に教育された者を、読み書きに長けた著者に向けて留め置く文化装置でもあったのである。

## 二 書籍のある書齋、包まれ縛られた日記

「ときどき「持参した」詩集をよみ飽きたときには一助の部屋にきて、一助の研究してゐる分裂心理というのを「…」研究することにした」という「私」。「分裂心理」についての抽象的な「文章」の「一節」一節に対して恋愛のパターンを宛がうその研究によって「人間の心理に対する私の眼界「が」ひろく」され、「こんな広々とした霧のかかつた心理界が第七官の世界といふものではないであらうか。「…」もつともつと一助の勉強を勉強して「…」分裂心理学のやうにこみいった、霧

のかかつた詩を書かなければならない」と時に思い至るのは、この「空想がち、な研究」が、先ず「絶えず空白がち、な「ノオト」を埋め合わせるものであつたことにある。「第七官」の手掛かりに繋がる啓発を受け、勉強不足を身につまされる「私」は、自作の詩を「ありふれた恋の詩」として裁断し「抽斗」に留め置いたままにしていたわけであるが、それは取りも直さずこの一助の部屋が「書籍と机のある「…」書齋」という文化装置が整えられた空間として構成されていたからに他ならない<sup>(11)</sup>。「床のなかで詩の本をよみ耽る」という「習慣」的本と同衾する「私」をして、「詩の本のあひだをぐるぐると循環し、幾度でもおなじ詩の本を手にしなければならなかつた」破目に陥らせていた所以の、「持つてゐるかぎりの」「まことにわずかばかりの冊数」の「詩の本」の貧弱さとは違ひ、<sup>(12)</sup>その書齋空間に備えられたより豊富な書籍は、より輿行のある読書を可能にしていたわけである<sup>(13)</sup>。

「私」が祖母から受け取った計十円の過半、とりわけその金額に含まれた「私」の寒々しい首をその曲線が覆うはずであつた「くびまき」購入用の代金は、「私」の旅立つ以前に「手紙に封じ」て送られていた。この代金が、一郎から六円の本代を預かりながら曲つた「マドロスパイプのでかいやつ」を購入してしまふ三五郎の「罪」深い「消費」による損失に曲げ宛がわれ、そして「分裂心理学」と「日本語になお」され

る『ドッペル何とか』という題名さえも彼には曖昧な「本」が「丸善」で購入されていたことに留意できる。<sup>(14)</sup>のみならず「たちの缺」「ボヘミアンネクタイ」「ヘヤアイロン」を買い求める彼の消費行動において、詩作志望の「私」は、その髪を「たちの缺」で無残に刈られ「一本の長い黒布として」「ボヘミアンネクタイ」を巻かれた有様の、しかし「ヘヤアイロン」を当てられてまんざらでもない「女の子」として、<sup>(15)</sup>高額のな本代の残金のなかで買い求められた一脚の「机」に座るに過ぎない反面、一助の書齋空間は、洋書を取扱う「丸善」の店舗を通じて近代西洋の知識にも及ぶ広がりを持っているのである。<sup>(16)</sup>

「私」に詩作の手掛かりを与えたこうした空間での研究がまた、その蹉跌をも明らかにしていたのは、その書齋が一助によって占有されていたことと無縁ではない。一助は「心理医者」「分裂医者」として「分裂心理」というのもった変態患者」を「単一心理に還すのを使命として」おり、その「臨床」医としての振舞いは、「主治医と患者との問答」と、「ノオトとペン」をもって慎重に聴取される聞書としてマニュアル化されているからである。「心理界」<sup>(17)</sup>は、関連書籍に満ちた彼の書齋空間自体であると同時に、その語彙を満遍なく網羅し集約する『改訂版分裂心理辞典』という一冊の本として凝縮されてもいる。その利用頻度の高さ故にこの『辞典』は、手に

取りやすい「本棚のもつとも下の段」に配置させられているわけだが、この座右の一冊の「左側」に一助の「日記帳」が並べられているという配置は、「心理医者」の個人的な書記と読書という内密な行為が「心理界」に相接し合う行為であると同時に、項目化され記述された一般性のなかに解消されてしまふ様をも表しているだろう。「みる、僕の気もちは日記帳に文字で記録されてある」という彼の文字化の身振りには、「小包み用の紐で緻密に縛りつけ」られ「茶色の紙で幾重にも包」まれていることにおいて、他の主体の書記／読書行為が締め出された上で保ち得る、個人的な書記／読書空間の内密性のなかに閉ざされてある。当の本人をしてさえ「とりだすまで」にほとんど手間ど」らせるとき、書記／読書空間の内密性を保証するその包装と緊縛に、他者と同様に自己もまた拒まれてある事態が、露呈しているのである。<sup>(18)</sup>

件の日記帳が「診察日記」でもあるところに留意できるのは、「隠蔽性分裂の兆候あり」と診断された「新患者」の治療上の問題とともに、「心惹かるること一方なら」ないその女性患者との間の「心の進展」上の問題が同時に発生しているからであって、こうした分裂心理をめぐる主治医と患者との関係には、男性と女性との個的で親密な対関係が指定されている。<sup>(19)</sup>しかし「辭のやうにひつそりして、僕の質問には決して返辭をしない」「沈黙」においては、「患者が識閥の下で

何を渴望しているかを知る手段」を断たれている限り、主治医の彼には「よほどの痛手」が与えられていると同時に、恋愛上の何らの進展が見られないのもあって、分裂心理をめぐる治療が依拠する問答や問書が男性医師に偏った言語行為であり、また文字記録に収斂した言語行為であることを端的に示してもいる。

幾重もの包装と緻密な緊迫を紐解き、「日記帳」に「文字で記録されている」「ぼくの気もち」は、「みろ、」と柳浩六なる「だらしない医員」の眼前に差し出される。浩六は、主治医の一助の不在時に病室に入り「ポケットのそとに置きわすれたためしがない」「手帖」に向かって「鉛筆をなめ」、診察日記を主治医の手からとりあげ「ては」よほど深刻な表情でしらべる」という対抗的な書記／読書の身振りを示していたのであるが、この「日記帳」は、女性患者をめぐる浩六との「論争」に供される証拠として彼が提出した記録に他ならない。「日記帳」の開示は、「主治医と患者とのあいだの問答」が、患者の「穿鑿はじつに迷惑だ」とその介入を締め出した「当事者二人のあいだの秘密」を、「日記帳」に認められた文字に物語らせていたわけである<sup>(20)</sup>。

### 三 床の間つきの部屋、机上の植物園

「さめぎわ」の時間に「寝床にいる様子」の二人の「会話」

において、一助は、弟の二助に事のあらましを打ち明けてまで、二助の夢を慎重に聴取し記録しようとする。それは、「昼寝のさめぎわなどに、ふつと癖の心に還る」際の「じめじめした沼地に張りついたやうな、身うごきのならないやうな、妙な心理」に言及する一郎にとつて、二助の「癖になつた夢」が、「癖のようにひつそりして」いる女性患者の心理を読み取る為の「貴い参考」に供し得ると目されているからである。「僕なんかの夢はべつに分裂心理学の法則にあてはまつてゐないやうだ」と眠たげに切り返す二助に対して一助は、「省略や隠蔽の悪癖」・「穿鑿性分裂」などの事しい一連の「病名をおつ被せよう」とし、入院を迫りながら、次第に主治医と患者の「当事者二人のあいだの秘密」に孕まれた自身の「失恋」について語り始める。これを契機に一転して「隠蔽癖」「被害妄想」と診断され、「治療の参考」の為の「癖の分裂心理」の「培養」を断られ、欠勤を決め込みながらやはり出勤していく一助に対して、自身が治療も入院も不要な「完全な健康体」であることを証しする為<sup>(21)</sup>に二助が語った夢とは、「ただ、僕自身が、僕の机の上にある癖になつてゐる夢にすぎない」。

それは、この日が、妹の「ノオト」の埋め合わせかのようにその「ノオト」だけには、プランクを作りたくない、「肥料の講義をききのがしてはならない日」であつたように、二助は東京帝国大学の農学科に籍を置き、自室での「二十日大根」と「癖」

を使った実験研究に取り組み、其々の実験結果を「荒野山裾野の土壌利用法について」「肥料の熱度による植物の感情の變化」という「論文のノオト」にまとめていることにある。「夢をおろそかに扱わない」「分裂心理学」の書記／読書行為の貴重な対象としての二助の如上の「夢」は、一助の書齋に隣り合うもうひとつの書記／読書空間自体において、とりわけ、その中核をなす「机」の上において夢見られていたのである。

「……二助は家中でいちばん広い部屋を占め、その部屋は床の間つきであつたが、半坪のひろさをもつた床の間は一面の大根島で「……」上には代用光線の設備があつて、夜になると七つの豆電気が光線を送るしかけになつてゐた。／＼二助は特別に大きい古机をもつてゐて、ここもまた植物園をかねてゐた。古机の上には、紙屑、ノオト、鉛筆、書籍、小さい香水の罌などと共に、私の知らない蘚のやうな植物が、いくつつかの平べつたい器の湿地のうへに繁茂し「……」てゐたのである。／＼「……」部屋の乱雑さについて、私はいちいち述べるのが煩瑣である。たたみの上には新聞紙に積んだ肥料の山がいくつかが散在し、そのあいだを罌につめた黄ろい液体のこやしが綴つてゐた。三五郎の不満のたねとなつてゐる例の土鍋は、日によつて机の上、床の間、椅子の上などに移動し、ピン

セツト、鼻掃除の綿棒に似た綿棒、玩具のような鋏、「……」シャベル等の農具一式、写真器一個、顕微鏡一個、その他。<sup>(23)</sup>

二助の部屋は、「私」が「掃除」に入室し「普通の部屋なみに扱」うことをさえ拒むような「乱雑」した空間という限りで、非日常の様相を呈している。家長や長男が取り仕切るはずの来客を迎える儀礼的な場を一人占有する次男の二助が、室内の臭気によって、他の家族を「二助の部屋からいちばん遠い地点である女中部屋」へ避難させることを余儀なくさせるとき、<sup>(24)</sup>この空間の、間取上の意味論的な布置は転倒させられているのである。こやしに浸された二十日大根が、「台」にならべられた「試験管」に生けられている「床の間」の有様においては、その「半坪」の空間に集約・提示されてもいる家族の装いもまた転倒させられたものである。

客間の座敷に見渡されるのは文字通り山川をなしたこやしの光景であり、「いちいち述べるのが煩瑣」なまでの物たちが示す「乱雑」な細部に溢れ返っている。招かれざる物たちの傍若無人な振る舞いによって、日常の立ち居振舞いを構成する空間や家具が侵されてしまつてゐる態を端的に示す「三五郎の不満のたねとなつてゐる例の土鍋」が、日毎、室内を「移動」して行くところに辿られるのは、この空間の全域が意味



論的布置の転倒に覆い尽されているという事態なのである。そして客間の装飾的で象徴的な「床の間」の空間の転倒した状態が、「古机の上」でも繰り返されているのを見遣るとき、「特別に大きい古机」に名残を留めている客間の中心的装置もが、意味論的布置の転倒に刺し貫かれていることが目の当たりにされている。転倒した空間に圍繞され、自身転倒した布置を持つこの机の上の藪になった夢が夢見られるとき、この部屋的主人であり、肥料学の研究に供された実験植物に対する超越的に醒めた観察者・記録者としての二助本人の意味論的布置もが、更なる転倒に晒されてしまっている有様をも垣間見得るのである。畳に散乱する実験用具・農具一式・観察記録器具に圍繞されたなかで、観察・記録の主体を支える細部・残滓である「紙屑、ノオト、鉛筆、書籍」といった文房具等が「藪のやうな植物が」「繁茂」した「いくつかの平べつたい器の湿地」と机の上で「共」生しているという身の回りに配置された書記／読書空間の日常風景に注視したい。実験・観察・記録上要請されるこの共生において既に、二助の夢が覚醒したまま夢見られている類のものであることは、その「器」と同様に「平べつたい」幾冊かのノオトに記録された「二助の失恋から生れた一篇の抒情詩」であるような「マコト二泪多キ少女」をめぐる先の二十日大根の論文の「序文」や、その「肥料の熱度による植物の恋情の変化」という標題に露呈され

た藪の「恋情」について「綴られて」いる「全文」に明らかである。

如上の二助の書記／読書空間の中で「よんだことを黙つてゐたい性質の文献」ながらも先の藪の論文の「ノオト」を「も」う以前から「ひそかな愛読書」としていた「私」に、<sup>(26)</sup>次の引用に見られる「室内」風景が立ち現れる。暗い女中部屋で三五郎に髪を切られると、「全身素裸にされたのと違はない気もちで、こんな寒くなつてしまつた頸を、暗い部屋のほかに置きどころもな」く「三五郎の部屋のくらがり」で「……まことに祖母の心になつて泣い」ていた「私」は、髪を直される為めに、二助の書記／読書空間に連れ込まれ、「明るい電気が下つて」いる上に、「大根島の人工光線をもつけ」ることによつて時に「室内」が「白っぽいほどに明るく」照明されたその「電気の真下」の、肥料の山と土鍋を押しやられた「部屋のまんなかに」<sup>(27)</sup>「坐らせ」られるのである。

睡りに陥りさうになると私は深い呼吸をした。「……」さうしてゐるうちに、私は、霧のやうなひとつの世界に住んでゐたのである。そこでは私の感官がばらばらにはたらいたり、一つに溶けあつたり、またほぐれたりして、とりとめのない機能をつづけた。二助「……」の上つぱりは雲のかたにかすみ、その雲は私がいままでにみたい

んなかたちの雲に交つた。土鍋の液が、ふす、ふす、と次第に濃く煮えてゆく音は、祖母がおはぎのあんこを煮る音と交らなかつたので、私は六つか七つの子供にかへり、私は祖母のたもとにつかまつて鍋のなかのあんこをみつめてゐたのである。「…」二助はふたたび綿棒をとつて森林の上を撫で、箒の大きさにひろがつた綿棒をノオトの上にはたいた。／それから二助が何をしたのかを私は知らない——私の眼には何もなく、耳にだけあんこの噴く音が来たのである。「…」／「鮮の花粉といふものは、どんなかたちをしたものであらう」私は心理作用を遠くに行かせないために、努めて学問上のむづかしいことを考へてみようとした。「…」しかしちき心は遠くに逃げてしまひ、私の耳は、二助のペンの音だけを際だつて鮮かにきいた。／「…」／「…」私はたちまち立ちあがり、二助のそばに行つた。しかし二助のそばに立つたときもう私は睡くなつてゐた。「…」顕微鏡をのぞきながらノオトを書きつつけてゐる二助の背中に睡りかかつた。二助は姿勢を崩さないで勉強をつづけた。／「…」／「睡いんだね。夢でもみたんだらう」二助はやはりペンの音をたてながら言つた。「…」<sup>28</sup>

「感官がばらばらにはたらいたり、一つに溶けあつたり、ま

たほぐれたりして、とりとめのない機能をつづけ」という「霧のようなひとつの世界」に「私」が「住」まわれるのは、こやしを煮詰める「土鍋」の位置に「私」が配置させられていたからに他ならない。<sup>(29)</sup>「土鍋」の位置に「坐」ってしまう故に、「土鍋の液が、ふす、ふす、と次第に濃く煮えてゆく音」を聞きもし、またその「音」に「祖母がおはぎのあんこを煮る音」を重ねて聞きなすまでに身の内に引き受けてしまふが故に、「私」は「六つか七つの子供にかへり、私は祖母のたもとにつかまつて鍋のなかのあんこをみつめて」しまふのである。そこには、土鍋のこやしを煮詰める音に「あんこを煮る音」が聴覚的に聞き取られ、視覚的に「鍋のなかのあんこをみつめてゐた」子供の頃の自身の身が見取られるまでに「みつめ」過ぎてしまふ「私」がある。<sup>30</sup>

「私」が束の間「住」まう「霧のような世界」とは単に、「霧」が「雲」になり「私」がいままでにみたいろんなかたちの雲に「交」る気象や、あるいは「うんこ」に見出されるような肛門期性愛、退行現象などを問題にする「心理学」の用語で記述され得るだけではない。その世界は、「ふす、ふす、」なる噴き出音を伴いながら、訓読みされる漢字の「雲」を音読みする際に放たれる「うん」の音と通低していた排泄物の「うんこ」を、おはぎをころころと包む食用の「あんこ」と同じ響きの内に呼び慣わす方言、幼児語のような言語自体による構成を

先ず持っているのである。<sup>(31)</sup>「私の眼には何もなく、耳にだけあんこの噴く音が来た」とき、「うんこ」が土鍋のなかで濃く煮えてゆくとき、文字通りその視覚上の文字は記号内容とともに溶解され、文字を失い記号内容を移ろわせたままの聴覚上の記号表現（「音」）だけが響き、異なる記号内容と組み換えられてやって来るものとして言葉は振舞い始めている。「私」が「心理作用を遠くに行かせないために、努めて学問上のむづかしいことを考へてみようとした」こと、そしてその内容が花粉の「かたち」についてであったことは、「とりとめのない機能」に揺るがされていたのが、先ずもって言語であり、文字であったことを確認させている。

「薛の花粉」の「かたち」をめぐるこの自問自答が言葉を失うのは、「二助のペンの音だけを際だつて鮮かにきい」てしまふ「私の耳」が、「ペン」の動きが何らの形態を認めるのを認められることのないまま、ただ「ノオト」を滑走し続けていることを聞き取ってしまっているからに他ならない。「私の眼には何もなく、耳にだけあんこの噴く音が来た」なかで「二助が何をしたのかを私は知らない」のであってみれば、それは、書記行為それ自体の音でさえなく、その営為が何であるかは半ば黙されたままの、そのみが「際だつて鮮かにきい」られる書記行為を支え、その下に広がる読書行為を手立てている細部の立てる「ペンの音」に過ぎない。「顕微鏡をの

ぞき、そしてノオトに書き、じつに多忙」な二助が終始無言であるように、無音の書記行為／読書行為の間隙で物音を立て続けているペンの音だけが、その間隙に伸べられた「ノオト」に広がる世界を喚起し続けている。そしてそのペンの音の「鮮」かさに聞かれるのは、草冠の草陰に見え隠れしながら、「苔」の世界が広がる机の「台」上の「薛」の物言わぬ様であったことを見落とすことはできない。「ばらばらにはたらいたり、一つに溶けあつたり、またほぐれたりして、とりとめのない機能をつづける」書記／読書の世界が、その部首のような個々の「文字」の部分にまで微分された手立てが弄されているものであるとき、その触手は、物語に埋め込まれた二助の「ノオト」の上のみでなく、「第七官界彷徨」なる作品世界の表面にまで伸ばされているのである。<sup>(32)</sup> ついに「顕微鏡をのぞきながらノオトを書きつづけてゐる二助「なる書き手」の背中に睡りかか」とき、「私」は、如上の様態を呈する音と文字それ自体にその身を直に預け寄せてしまっているのである。<sup>(33)</sup>

#### 四 ノオトの上の花粉、たたみの上の髪屑

「……二助はなお薛から眼をはなさないでうで栗を噛み割つたので、うで栗の中味がすこしばかり二助の齒からこぼれ、そしてノオトの上に散つたのである。私は思はず

頸をのばしてノオトの上をみつめた。そして私は知った。薨の花粉とうで栗の粉とは、これはまったく同じ色をしてゐる！そして形さへもおんなじだ！そして私は、一つの漠然とした、偉い知識を得たやうな気もちであつた。——私のさがしてゐる私の詩の境地は、このやうな、こまかい粉の世界ではなかつたのか。薨の花と栗の中身とはおなじやうな黄色つばい粉として、いま、ノオトの上にはちらばつてゐる。そのそばにはピンセットの尖があり、細い薨の脚があり、そして電氣のあかりを受けた香水の罍のかげは、一本の黄ろい光芒となつて綿棒の柄の方に伸びてゐる。／けれど、私がノオトの上にみたこの一枚の静物画は、ちぎ二助のために崩された。二助があわてて二本の薨をつまみあげ、そしてノオトから栗の粉をはたいてしまつたからである。「……」／女中部屋で私は詩のノオトをだしてみた。私はいま二助のノオトの上にみた静物画のやうな詩を書きたいと思つたのである。しかし私がかきかかつたのはごく哀感に富んだ恋の詩であつた——祖母がびなんかつらを送つてくれたのに、私にはもうかつらをつける髪もない。ヘアアイロンをあててもらひながら頸にうける接吻は、ああ、秋風のように哀しい。そして私は未完の詩を破つてしまつた。<sup>(34)</sup>

微細な物「音」だけが響き渡る世界に移行する直前「それから二助が何をしたのかを」「私」が辛うじて確認してゐるのは「綿棒をとつて森林の上を撫で、箒の大きさにひろがつた綿棒をノオトの上にはたいた」という所作であつた。この所作によつて「ノオトの上に」現出してゐた光景を追認し得るのは、後日祖母からの「小包み」に「幾つかの美髪料の包み」とともに入つてゐた「うで栗」を皿に盛つた「私」が「二助の机に近づき皿のおき場処を考え」「まだ皿をおかないでゐた」ときの件においてである。<sup>(35)</sup> そのわずかな遅延された躊躇のうち、机上に広げられた「ノオト」上に「抜きとられ」「つまみあげ」られた薨が「よこたわり、花粉の散らばつた光景が垣間見られてゐたのである。それは、個々の「文字」といった最小の意味単位や「部首」といったその構成要素にまで微細に弄されてゐた「文字」をめぐると同じ地平——書き物机の上の「ノオト」——に、「贖めたり」「……」息を吹きかけてみたり」という「なかなか緻密な方法で行はれた」ところの、薨苔類をめぐる観察・研究が横たえてゐた薨やその花粉の光景であつた。花粉という微細に観察されるのは、視覚に留まらず、文字をめくり弄された手立てが「ついに左手の人さし指と拇指」をして花粉が取られるやうな触知の世界への直接であり、また「鼻」への吸引・粘膜への定着においてその「比較」観察が可能であるやうな「匂ひ」の世界への直接

であつて、そこにおいて果たされる「粉」の世界の広がりなのである。彼の「眼」には「なお」保持されている観察対象（薺、花粉）とそれを記録する為の文字との弁別がふいにされるのを、「私」が目撃してしまうのは、彼の何気ない所作が「うで栗の中味がすこしばかり二助の齒からこぼれ、そしてノオトの上に散つた」という不意の事態を呼び込んでしまつていたからであり、「私」が「思はず頸をのばしてノオトの上をみつめ」てしまふからに他ならない。そこに「私のさがしている私の詩の境地」を探し当て得るとも感じられ、女中部屋で「詩のノオト」を出し、「いま二助のノオトの上に見た静物画のやうな詩を書きたいと思」い、「書きかか」りもしつつ、「破つてしまつた」「私」はしかし書き手に転じることはない。それは、「黄色つばい粉として、いま、ノオトの上にならばつてゐる」薺の花粉や栗の粉と「おなじやうな」「こまかい粉の世界」として「詩の境地」が広がつてゐることを「みつめ」てしまふそのこと自体に起因していた。その凝視のうちには、文字をめぐり弄された手立てが及んでしまつてゐる世界、つまり、「ノオト」に書き付けられた文字の微分化の果てに認められる「鉛筆」の芯の粉末・「ペン」のインクの粒子という（およそ詩の形を結び得るとは思えないまでの）微細な世界にまで眼が凝らされてゐるからである。

「…」私はつひに飯櫃のそばにぼんやりと立ちつくし、そして混乱した室内風景のなかに、私の哀愁をそそる一つの小さい風景を発見した。三五郎のかけてゐる椅子の脚からこやし用の土鍋のある地点にかけて、私の頭髮の切屑が、いまは茶色つばい粉として散り、粉のうすれたところに「…」鱧があり、粉のほとんどなくなつた地点に「…」鍋があつた。そして私はいまさらに祖母のことや美髮料のことを思ひ、ボヘミアンネクタイに包まれた私の頭をふつたのである。<sup>36)</sup>

如上の栗を自身食べこぼしながら「なお薺から眼をはなさないでうで栗を噛み割つた」二助の傍らで、この些細な事の出来を「みつめ」ていた「私」において、花粉の散らばる二助の「ノオト」の上での「こまかい粉の世界」に微分された光景として「第七官界彷徨」という作品自身が立ち現れようとしてゐる。というのは、断髮の翌々日「混乱した室内風景」のなかに「…」発見した「哀愁をそそる一つの小さい風景」において、「いまは茶色つばい粉として散」つていた「頭髮の切屑」の、その粉々の状態に、「こまかい粉の世界」に取り散らされていた「私」自身が「みつめ」られてしまつていたからである。<sup>37)</sup>

## 五 粉葉の包み紙

先の一助の日記帳を浩六宅へ届ける「私」が、浩六なる「異国の文学を好む分裂医者」に「くびまき」を買ってもらうことにおいて、「好いた柄のを買いなされ」と祖母が「私」に言っておいて、「聞いた作品の首巻に差し戻されるのは、「私」が「僕の好きな詩人に似ている」という浩六の「変な聯想能力」にある。この能力を喚起され提示されるのが、「本棚の前を歩いたり、また椅子にもどつたり」しながら、あるいは「相手の忘却にはたらかかける」「老人の愚痴をきいてるあひだに「……」思ひだし」「本棚から一冊の書籍をぬきだし」ては「早速」「……」披」かれた「目的のペエチ」においてであったことに留意したい。

浩六が「披」く「ペエチ」の、「他の箇処は私にわからない文字で埋められ」た「よほど部厚な書物」の紙葉に挟まれ、「私には独逸文字か仏蘭西文字かわからなかつたところの文章」に添えられあるいは圍繞された「異国の女詩人」である「一人の女の小さい写真」は、その後、該当「ペエチをさがしあてる」ことにさえ「私」を手間取らせた上、言語上の読解のみか、その「文字」自体をさえ弁別し得ないうちに提示されている。しかしその書籍を持って「次室の客となつた」「私」には、その「たたみの部屋で、一隅に小さい机がひとつあり、丁

度私が書物を見るのに好都合であつた」という閲覧空間において<sup>(38)</sup>は、写真の女詩人が「はじめ私が一助の横からみたほどに佳人ではなかつた」というものの、「ペエチを横にしたり縦にしたたり、いくたびかみ」られたあとで、「私自身は「この」佳人に遠いへだたりをもつた一人の娘にすぎなかつた」と思い至らざるを得ない分別が、「佳人を聯想させる」自身の姓名への「けむつたい思ひ」に取り巻かれた当初のままに弁えられてはいる。にも関わらず「つひに私は写真と私自身との區別を失つてしま」うのは、「塩せんべい」を食べることが憚られるまでに「辺りが静寂すぎた」なかで「あつ、いお茶」受けに「どらやきをたべ、そしていつまでも写真をみていた」というその凝視のうちにある。「つひに写真のうえに顔を伏せてしま」うまでの「睡気」へと誘う安逸な間食は、餡が皮に挟まれた「どらやき」を食み且つ「あつ、いお茶」に溶け込ませる食感に、糞便という肛門の営みを溶解させる土鍋の音に回顧されていた先の様を、口腔に蘇える食の感触において、静やかにしかし「鮮かに」彷彿（ふす、ふす、）させていたのである。こうした事態は、文字通り、浩六が「披」いて見せた「ペエチ」の、文字自体をさえ判じ得なかつた文章に添えられ圍繞された「小さい写真」という印刷上の割付・配置に見取られていた事態、すなわち「私」に対しては音立てず意味も取り結び得ない「文字」の物体化において、「自身との区

別を失つてしまふまでの写真との純粋な対面が、「主」「客」を溶解させる純粋な視覚の獲得／あるいは「主」「客」を成り立たせる視覚の効果の失効として出来ていたのである。<sup>(39)</sup>

「ただ頭髮が似ている」という「頭髮」をめぐる「類似」において、「私」は「異国の女詩人」という書き手として浩六に聯想されもし、また「私」をして「屋根部屋に住んで」の「風や煙の詩」作を「空想」せしめてもいた。しかし、それは、浩六が「遠い土地にいつた」後日「けれど私がノオトに書いたのは、われにくびまきをあたえし人は遙かなる旅路につけりといふやうな哀感のこもつた恋の詩」であれば、彼女との聯想のうちに「私」自身を書き手として夢想することに蹉跌してしまつていた。そして、その「詩人について知らうと」「女中部屋の机のうへに、外国の詩人について書いた日本語の本を二つ三つ集め」るのであるが、「しかし、私の読んだ本のなかにはそれらしい詩人は一人もゐない。これをもって「彼女はたぶんあまり名のある詩人ではなかつたのであらう」という一文で呆気なく作品を締め括つてしまふのであれば、「私」から聯想されたその書き手は、そもそも、他の文献の参照において想起することも、詩人としての「名」が与えられることからも阻まれていたという蹉跌にも晒されていたのである。<sup>(40)</sup>

「ペエチを披く」手付きにその夢想と蹉跌とが垣間見られ

ていたことに留意するとき、女詩人をめぐる浩六との聯想の共有（「見方」の「賛同」）が果たされなかつた経緯と重ね味わわせられているのが、「一人て柄がわからんぢやつたら三五郎に歩んでもらつて、二人でとつくり品きだめをして」「買いなされ」という祖母の言い付けに反して「私」にくびまきを買ひ与えることのない従兄の三五郎との「共食」の蹉跌においてであつたのは偶然ではない。<sup>(41)</sup>

「……」鉢目の薜が花粉をつけたころ、垣根の蜜柑は色づくだけ色づいてしまひ、そして佐田三五郎と私の隣人とは蜜柑をたべる習慣をもつてゐた。／「……」／「……」そして三五郎と隣人とは「……」垣をへだてて立つてゐたのである。／「……」／三五郎が女中部屋に来たとき、私は着物のたもとと共に机に顔をふせてゐて、顔をあげるこゝとが出来なかつた。「……」／最後に三五郎が来たとき、私はあかりが眼にしみて眩しかつたので、机に背をむけてゐた。丁度むかうの釘に一聯のかち栗がかかつてゐて、これは私の祖母が送つてくれた最後の一聯であつた。そして私は羽織の両脇に手を入れ、机にもたれ、この怪しい部屋かざりをみてゐたのである。／三五郎は机に腰をかかけ、しばらくかち栗をながめてゐた。彼はなにかいひかかつてすぐよした。私がふたたび涙を拭いたためであつ

た。三五郎はかち栗をはづして私の頸にかけ、ふたたび机にかけ、そして幾たびか鋭い鼻息をだした。「……」三五郎は私の胸で栗の糸を切り、かち栗を一粒ぬきとり、音をたてて皮をむき、また一粒をたべ、そしていつまでもかち栗をたべてゐた。<sup>(42)</sup>

「家のぐるりに生垣になっている蜜柑の木」に実をつける「驚くほど季節おくれの、皮膚にこぶをもつた、種子の多い「……」果物としてはいたつて不出来」で「すっぱい」「地蜜柑」を「隣人」とともに「習慣」的に三五郎が食するとき、あるいは「むこうの釘に「……」か」けられていた「祖母が送つてくれた最後の「一聯」の「かち栗」を、「私の頸にかけ、ふたたび机にかけ」、「私の胸で栗の糸を切り、かち栗を一粒ぬきとり、音をたてて皮をむき、また一粒をたべ、そしていつまでもかち栗をたべ」続けながらしかし、三五郎の食の営みに垣間見えている「皮をむく手付きや、これに支えられた「口」に運び咀嚼する口付きが、上京当初のように「私」には分有されることがない為<sup>(43)</sup>に、彼との共食に「私」は与り得ない<sup>(44)</sup>。こうした彼の食を支える手の営みによって「私」の「ひどく赤いちぢれ毛」が断髪されヘアアイロンをあてられていたのもあって、その髪の様態において、書き手の聯想と詩作への夢想とそれらの蹉跎の味を味わわせられていたのであ

る。

畳の上に取り散らされた頭髮の切屑に言葉のない「私」が「いまさらに祖母のことや美髪料のことを思」うのは、頭髮の切屑の形状において見取られていた「美髪料」の「びんなんかづらと桑の根をきざんだ」粉葉の形態とその調査に示された細かい手付きに、祖母の細やかな配慮が垣間見えていたからに他ならない。花粉が取り散らされた「ノオト」の上にこぼれ散った件の栗とともに送られてきた「小包み」に包まれた「包み」に重ねて包み込まれたこの美髪料が、「私」の旅立ちの際に祖母が買ってきた「バスケットに詰めた最初の品」であったという細部に注視したい。「バスケットに「……」深い吐息をひとつ吹きこみ」「もうひとつ「……」吹きこみ」ながら、「一度バスケットにつめた美髪料をとりだし、二品の調査を一包みずつに割りあて」「障子紙を四角に切つた大きい葉の包みを一一つ一つ作つて」「泪を注」ぎながらつめなおしたという繰り返し示/湿される配慮・心配の手付きに見え隠れしているのは、<sup>(45)</sup> 国もとを離れる「私」のそもその成り立ちであった<sup>(46)</sup>。この包みは、「こまかい粉の世界」に自身の詩の境地を夢見る書き手としての「私」が、髪にあてられる粉葉を包む「包み」「紙」のなかに既に包み込まれていたということを如実に物語っていたのである。粉葉が包まれたその包み紙には、身内に言い含められた言葉の木霊のうちに「煎じ」「につ」められ



とのなかつたもうひとつの「土鍋」の音や、ついに孫娘の「私」には聞かれることのなかつた祖母の次の「しめつぽ」い声音が、「細かい字でいつぱい詩の詰ま」ることを夢想しながら「絶えず空白がちであつた」「ノオト」の音と反響しながら、今は乾いた細かな物音を立てていたのでなかつただろうか。

「びなんかづら七分に桑白皮三分。分量を忘れなざるな。土鍋で根氣よく煎じてな。半分につまつたところを手ぬぐひに浸して——いつもおばあさんがしてあげるとおりぢや。固くしぼつた熱いところでぢれを伸ばすのぢや。毎朝わすれぬやうに癖なおしをしてな。念をいれて、幾度も手ぬぐひをしぼりなおしてな」<sup>(47)</sup>

註

- (1) 永井紀代子「誕生・少女たちの解放区——『少女世界』と『少女読書会』——」(奥田暁子編「聞き合う女と男」藤原書店一九九五)、黒澤亜里子「尾崎翠と少女小説」(稲垣真実編『定本尾崎翠全集』下巻、筑摩書房一九九八)参照。  
(2) 塚本靖代「尾崎翠」再評価の流れと「少女論」(映画パンフレット『第七官界彷徨 尾崎翠を探して』旦々社一九九八)参

照。

- (3) 稲垣真実・竹内道夫「年譜」(前掲『定本尾崎翠全集』下巻)参照。

(4) 正しく「一九七一年の瀬もおしつまつたところ、書店の棚で『アップルパイの午後』といういささか少女趣味的な表題の、手に取るのも照れくさい「…」作品集を目にとめたとき、記憶の片すみに「…」花田清輝氏の言葉がとどまっていなかったら、はたして私はためらいを覚えつつもあえてこの書物を購って、いたかどうか」と述べるとき山田稔は、如上の経緯の所在を、しかし「たちまち魅せられ」ながら「何の解説も付せられて」いなかったこの作品集の作品を読み進むにつれ感じ取られた「痛ましい」もののうちに言い当ててしまっている。山田稔「歩行する辭」『尾崎翠全集』(創樹社一九七九)五三六頁。

- (5) 前掲「年譜」四六九頁。

(6) 古谷鏡子「日常の中の非日常空間・物の位置」(『新日本文学』一九八二年一月号)参照。「日常的な食物をはじめとして「…」頭痛、耳鳴、ちぢれ毛などの生理的身体的要素「…」気象条件さえ、偏頭痛の持病をかかえていた」尾崎翠、引用者「自身の生理と無関係ではない。」八四頁。

(7) 尾崎翠「第七官界彷徨」(前掲『定本尾崎翠全集』上巻)二七七頁。本稿では、作品からの引用はこの一九九八年筑摩書房版に拠り、註にて適時頁数を示した。引用の際の傍点は引用者に拠り、引用者の補足等は「」内に示した。

- (8) 同右二七八頁。

(9) 同右二七七—八、二九二頁。関礼子『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』(新曜社一九九七)二四七—九頁も参照。

(10) 同右二八〇—一、四頁。

(11) 同右二九一—二頁。

(12) 同右二八八頁。

(13) 塚本靖代は、読書行為におけるジェンダーの問題として、大正時代の「女学生」・「女の子」の読書が制限され、監視・管理されていたことに触れて、「本を読みたいという妹の願いを聞き届け、しかも本を買い与えることのできる力」をもち、「妹」……ひとりでは決して触れることのできない、新しい知識を取り入れる窓」としての「同世代を生きる兄」の役割を指摘している。「変な家庭の永遠の妹、小野町子」前掲『第七官界彷徨 尾崎翠を探して』一五頁。

(14) 「第七官界彷徨」二八三—六頁。

(15) 同右二九七—八、三三四、三三七—四〇頁。

(16) 寺田寅彦「丸善と三越」(初出一九二〇年六月)松村友視編『編年体大正文学全集』第九卷(ゆまに書房二〇〇一)参照。

(17) 「第七官界彷徨」二八六、三二二、七頁。ジャック・ラカン／小出浩之他訳『精神病』上(岩波書店一九八七)一一頁参照。

(18) 「第七官界彷徨」三三七、九頁。

(19) キットラー／石光泰夫・石光輝子訳『グラモフォン・フィルム・タイプライター』(筑摩書房一九九九)「タイプライター」の章参照。

(20) 「第七官界彷徨」三二六—八、三二九—六三頁。

(21) 同右三二〇—二七頁。

(22) 同右三〇四、一四頁。

(23) 同右二八八—九頁。

(24) 同右二八一頁。

(25) 原克『書物の図像学——炎上する図書館、亀裂のはしる書き物机、空っぽのインク壺』(三元社一九九三)第三・四部参照。

(26) 「第七官界彷徨」三〇四頁。

(27) 同右二九六—三〇〇、三四二頁。

(28) 同右三〇〇—一頁。

(29) 近藤裕子は「わたし」と他の「わたし」と「が」、肉体の境界を越え、互いの身体のなかに溶け広がる「契機として「同じ匂いをかき」「同じ音楽を聞くと」という「感覚の共鳴」を指摘している。「匂いとしての「わたし」——尾崎翠の述語的世界——」(『日本近代文学』第五七集、一九九七年十月)一〇三頁。

(30) 「大井板のすきま」を通して確保された視覚を介して「第七官」といふの「が」感じられたという件も参照。「第七官界彷徨」三二七—八頁。

(31) 山田稔は、こやしを煮詰めるこの箇所に「幼児性(うんこ↓あんなこ)」が見られることを指摘し、比喩や想像や連想に裏打ちされた尾崎翠の「ユーモア」について論及している(前掲山田稔稿五三八—九頁)。実際に、例えば鳥取県を含む中国方言として区分される島根県の方言(幼児語)で、「あんなこ」が大抵のうんこを意味する用例がある。尚学図書編『日本方言大事典』(上)小学館一九八九、藤原与一『日本語方言辞書』(上)東京

堂出版一九九六。山田の指摘も踏まえ菅本康之は、「唯物論的なユーモア」としての恋が「第七官界彷徨」に遍在するところに「もの」への偏執的なアプローチ」を見取り、バフチンの指摘する「糞」を中心にしたグロテスクリアリズムとは違う、フロイト的な代替的な技巧としての精神のエネルギエのエコノミーに関わるものとしてのユーモアの性格を指摘している。「光源としての唯物論的ユーモア」『昭和文学研究』第三六集（一九九八年）六八一七〇頁。

(32) 古谷鏡子は「木屋」等の作品について触れながら次のように指摘する。「……そのとき現前する實在の木屋は姿を消し、言葉そのもの、言ってみればシーニュ（記号・表徴）としての事物が姿をあらわしてくるように見える。／一貫した意味の体系から解きはなたれ、自立したシーニュのような個々の事物、事象、存在は、それぞれが等価なものとして小説を構成する要素となり、あるときは地紋のように散りばめられ、また種々の組合せによって別個の作品に仕立てられてゆくが「……『第七官界彷徨』では「……この作者は何事かが成就することを意識的に拒んでいるようにさえ見える。「……成就しないことの浮遊感と、意味体系から解きはなたれた個々の事物とは表裏の関係のように思われる。」前掲古谷稿八五頁。

(33) 川上弘美が「言葉そのもの」（『鳩よ！』一九九九年一月月号）で述べる「第七官界彷徨」の読書体験を参照。それは、「表紙にはうすみどり色のふきのとうの絵がある」「クリーム色の文庫本」の形状において「てのひらによくなじませられつつ、

時に「畳の目の跡を頬につけて横たわって」「寝入」りながらも「ただ文字だけがあらわれた」「夢」の中の経験として語られている。川上は「言葉というものの持つ混沌とした力をかきりいっばい引き出した（それも、さりげなく）」ところに尾崎翠の「真骨頂」を見ている（六四一―五頁）。

(34) 「第七官界彷徨」三四一―三頁。

(35) 同右三四一―二頁。

(36) 同右三三一頁。

(37) ヴァルター・ベンヤミン／浅井健二郎訳『ドイツ悲劇の根源』下（ちくま学芸文庫一九九九）参照。「屍体の産出は、死の側から見れば、生にほかならない。手足の喪失をまつまでもなく、老いてゆく身体の変化をまつまでもなく、排泄や沐浴のすべての過程において、屍体的なものが一片ずつ身体から剥落してゆく。そして、生きている体から死物のように切り落とされる爪や毛髪こそが、屍体となったあともまだ伸びるのも、偶然ではないのだ。（死を忘れるな）という警告が、肉体そのもののなか、記憶そのもののなかに、つねに目覚めてある。」一四〇頁。

(38) 「閲覧室」を備えた「図書館」空間については、末國善己「異端・図書館・分身」（『尾崎翠作品の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室二〇〇〇）に指摘がある。

(39) こうした出来事は、例えば角田光代が「尾崎翠の本を借りた日のことを、こんなふうにくっきりと記憶している」という読書体験に垣間見ることができている。「夕方、自転車に乗って小さな

図書館にいき、人の気配のまるでない本棚に彼女の名前を見つけた。重たいその一冊を自転車のかごに放りこんで、橙に染まる光景のなか、家を目指して帰ったのだ。けれど「…」当時私は自転車など乗れなかったし、家の近所の図書館は近代的で大きく「…」人でこったがえしていた。「…」とにかく私は印象深いだれかにあったようにそのときのことを覚えていて、その少々ねじまがった記憶こそ尾崎翠の現実なのだと思う。「…」そのときのことを思い出すたび私は、名づけられ決定づけられることからのがれて存在している世界を、うろろうと行き場なく彷徨う登場人物たちと、途方にくれたような視線を交わしているような気分になるのだ。「…」退屈な隙間の、幾重もの現実「前掲『鳩よ!』六一頁。

(40) 本章冒頭からの引用は「第七官界彷徨」三六一―三五頁。

(41) 塚本靖代は、言表不可能な「私」の欲望のシニフィエがそれにおいて浮かび上がる一助、二助という兄たちの数字に注目しながら、三五郎、浩六、当八と数字の男たちをスライドしていく物語のなかで、兄と兄でない存在のギャップを表している「四」の不在を孕んだ従兄三五郎の「準」兄の位置を指摘している。前掲「変な家庭の永遠の妹、小野町子」一六一―七頁。

(42) 「第七官界彷徨」三四九―五〇頁。

(43) 同右二八六―七頁。

(44) 尾崎翠における食の営みについて古谷鏡子は次のように指摘している。「尾崎翠の書く恋愛の場、男と女のあいだにはかならずと言っていくらい食物が在る。「…」口中に入れる、噛む、

甜める、味合う、嚥下する——食べる行為と感覚はいかにも性的経験のそれに似ている。黙々と塩豆をかじる感覚と味合いは、ここでは恋の会話に匹敵し、接吻や抱擁と等価なのである。」古谷前掲稿八四頁。

(45) 「第七官界彷徨」二七八―九頁。

(46) 以下の祖母の言葉を参照。「——さうはいつても、都の娘子衆がどれほどハイカラで美しいとて人間は心ばえが第一で、むかし神さまは頭のちぢれてゐた神さまほど心ばえがやさしかつたといふではないか。天照大神さまもさぞかしちぢれてゐたお髪をもつてゐられたであらう。」同右二七九頁。

(47) 同右二七九頁。